代替医療 最新ガイド

▷9◁

症例報告の限界

大野　智

メシマコブは、1968年に日本の研究者が動物実験でがん抑制作用を報告したことから、抗がん効果が期待されているキノコです。

漢方としては昔から使われていて、止汗・利尿作用があるとされています。ただし、多量に摂取した場合、下痢やおう吐を引き起こす可能性がありますので、注意が必要です。

では、ヒトでの科学的検証の有無を米国立医学図書館のデータベースを用いて調べてみましょう。今年8月末に検索した結果、臨床試験やコホート研究（ヒトの集団を対象に行う研究の一手法）の報告はありませんでしたが、症例報告が3件ありました。

一つ目は、前立腺がんの症例です。ホルモン療法や放射線療法など抗がん治療の効果がなくなり、治療が中止されたのに伴い、患者が自己判断でメシマコブを摂取したところ、数カ月後の画像検査で腫瘍が消失し、腫瘍マーカーも正常になったと報告されています。

二つ目は、肝細胞がんに骨転移が合併した症例です。頭がい骨への骨転移に対して、放射線治療を行うも効果がなく、その後、無治療で経過を観察していたところ、放射線治療の10カ月後に頭がい骨の病変と肝臓にもともとあった肝細胞がんの病変が一緒に縮小しました。この患者が放射線治療開始前からメシマコブを摂取していたことから、メシマコブの抗がん効果の可能性について言及されています。

三つ目は、肝細胞がんに肺転移が合併した症例です。この患者は、病期が進行していたため、手術や化学療法などの治療を受けることができず、未治療のまま自己判断でメシマコブを1カ月間摂取していました。そして6カ月後の画像検査で肝臓と肺の腫瘍が消失したと報告されています。

ここで症例報告という形式の学術論文について解説したいと思います。症例報告は、ある治療法がよく効いた症例や非常にまれな症例が報告され、その後、類似の病態を示した患者の診断・治療の情報源として役立てられています。症例報告が契機となって新治療法が発見されることもあります。

ですが、症例報告で得られる情報からは、どれくらいの確率でどれくらいの効果があるのか全体像を判断することはできません。しかも、症例報告の場合、偶然起きた現象を過大に評価してしまう可能性があります。例えば、肝細胞がんは6万～10万例に1例の割合で自然にがんが消失することが過去の調査で分かっています。ですから、今回紹介した症例報告の治療経過は、メシマコブを摂取しなくても起こった現象かもしれません。

今後は、これらの問題点を解決すべく、ヒトでの大規模臨床試験が行われることが望まれます。

（金沢大学補完代替医療学特任助教授）

茶色い大きなメシマコブ
＝太田富久・金沢大学教授提供